

## 12. レーニン『何をなすべきか』

ナロードニキとの闘争という形で闘いを開始したロシアのマルクス主義者達は、1898年には社会民主労働党を結成し、本格的な政治闘争を開始しはじめた。しかし、この新しい党はまだ、綱領、規約、戦術等にわたる思想的統一を勝ちとったわけではなくすぐさま路線上の対立が表面化せざるをえなかった。

「何をなすべきか」（1902年）は、この若い党の中に現れた最初の日和見主義的な潮流である「経済主義」との闘争のために書かれた小冊子である。この経済主義は一言にしていえば、理論の意義の軽視と自然発生性への拝跪と特徴づけられるが、単に「国際的な日和見主義のロシアの一変種」たるにとどまらず、社会主義運動の中で（とりわけ運動の若い時代には）不断に発生してくる傾向であり、我々はレーニンのこの闘争から、多くの一般的教訓をひきだすことができるであろう。

「ラボーチュ・デーロ」等の機関紙誌に依拠する経済主義者達の主張の第一の核心は、永続的な統合のためには批判の自由が必要である」といって、あらゆる理論上の論争や意見の相違や政治問題、党建設計画などについて無頓着を装い、従ってマルクス主義理論への修正や歪曲の試みに対して寛容を説くところにある。レーニンは、「党内闘争こそが、党に力と生命をあたえる」というマルクスの言葉を本書の冒頭に掲げ、このような「批判の自由」が意味するのは、実際にはベルンシュタイン的な修正主義を擁護することだと批判し、革命運動における革命理論の意義を全面的に擁護する。「革命的理論なくしては革命運動もありえない」「特にロシアの社会民主主義者（マルクス主義）にとつては、第一にその運動がいまようやく形づくられつつあるということ、第二に「社会民主主義運動が、その本質そのものからして国際的である」こと、第三に「全人民を専制政治のくびきから解放すべき」ロシア社会民主主義者の国民的任務からも、理論の意義はなおさら強調されなくてはならない。

さらに、この経済主義者達はこうしたレーニンらの立場に対して、「発展の客観的あるいは自然発生的要素の意義」を過小視するものだと非難する。このような経済主義の主張は、運動の経験や訓練の不足によつて生まれたロシアの革命家の「欠陥を美德にまつりあげる」ものであり、社会主義者の任務を意識的に低め、せばめるものである。経済主義者達が美化する、『自然発生的要素』とは本質上、意識性の萌芽にほかならない」のであり、社会主義者は労働者の意識を、単なる雇主との対立のめざめから、「自分たちの利害が現代の政治的、社会的制度全体と和解しえない対立にあるという意識」にまで高めることにある。そして、このような意識はただ外部からのみもたらしうるものなのである。「労働運動の自然発生性へのいかなる拝跪『意識的要素』の役割、つまり社会民主主義の役割のいかなる軽視もとりもなおさず……労働者にたいするブルジョア・イデオロギーの影響をつよめることを意味する」。自然発生的な労働運動とは組合主義であり……組合主義とはまさしくブルジョアジーによる労働者の思想的奴隷化を意味する」のである。

経済主義者達は、「いま社会民主主義者の当面する任務は、いかにして経済闘争そのものにできるだけ政治性を付与するかということである」とか「経済闘争は、大衆を積極的な政治闘争にひきいれるために、もっとも広範に適用されるべき手段である」と主張するが、これに対して、レーニンは次の様に答えている。経済闘争は、「労働力販売の有利な条件を獲得するための労働者階級の闘争であり「経済闘争に政治性を付与する」というのは、実質上「社会民主主義的政治を組合主義的政治にひくめよう」とすることである。「革命的社會民主主義は、改良のための闘争を、つねにその活動にふくめてきたし、いまでもふくめている。……一言でいえば、革命的社會民主主義は、改良のための闘争を、全体にたいする部分として、自由と社会主義とのための闘争に従属させるのである」。

そして、労働者階級の「革命的積極性」を「培養」することは、社会主義者が「経済的基盤のうえに立つ政治的扇動」にとどまらず、「全面的な政治暴露を組織する」ことによつてのみ可能となる。だから、「社会民主主義者の理想は、労働組合の書記ではなくて、どこでおこなわれたものであろうと、またどんな層または階級にかかわるものであろうと、ありとあらゆる専横と圧制の現れに反応することができ、これらすべてのあらわれを警察暴力と資本主義的搾取とについての一つの絵図にまとめあげることが出来る「護民官」でなければならない。

そして、こうした経済主義には、組織上の「手工業性」が照応する。つまり、もっとも身近な要求の為の闘いを掲げ、ゼネストや「刺激的なテロル」を組織することを第一の任務にする経済主義者には、「政治的反対や抗議や憤激のありとあらゆる現れをむすびつけて一つの総攻撃にする全国的な中央集権的な組織」＝「プロレタリアートの解放闘争の全体を指導する能力のある革命家の組織」

を建設することなど全く及びもつかないことである。しかし「社会民主主義の政治闘争は、雇主と政府にたいする労働者の経済闘争よりずっと広範で複雑」であり、それゆえに「革命的社会民主党の組織は、ぜひともこのような闘争のための労働者の組織（労働組合等）とはちがった種類のものでなければならないのである」。レーニンはいう。「われわれに革命家の組織をあたえよ、しからばわれわれはロシアをくつがえすであろう」と。

そして、このような党の建設は、「ひんぱんに発行され規則正しく配布される全国的政治新聞なしには不可能」であり、こうした新聞こそが「集団的宣伝者及び集団的扇動者」、「集団的組織者」となることができるのであり、それこそが「階級闘争と人民の憤激の一つの火花をふきおこして全般的な火災にする巨大な鍛冶用ふいごの一小部分となるであろう」。

### 13. レーニン『一步前進、二歩後退』

——革命政党の組織原則は何か？

前回の『なにをなすべきか』は、労働者の階級闘争における革命的な前衛政党の意義と前衛政党建設の楨杵となるべき全国的政治新聞の役割りを明らかにするものであった。そして、今回の『一步前進二歩後退』は、これを進めて、この前衛政党の組織原則はいかなるものでなければならないか、これを明らかにした画期的な著作である。

『一步前身二歩後退』は、直接には、1903年の、ロシア社会民主労働党第二回大会の顛末記であり、全面的な総括である。ロシア社会民主労働党は、レーニンらの「イスクラ」グループを中心に、いくつかのグループの代議員を結集して、ブリュッセルとロンドンで第二回大会を開催したが、この大会は実質上の結成大会といえるものであった。「綱領問題と戦術問題とにおける統一は、党を統合し党活動を中央集権化するための必要条件ではあるが、まだ十分な条件ではない。そのためには組織の統一が必要である。そして、この組織の統一は、家庭的なサークルのわくをいくらかでもはみだしている党にあっては、確定した規約なしには、多数にたいする少数の服従なしには、全体にたいする部分の服従なしにはありえない」。そして、大会ではじめて、単一の綱領、規約を採択し、中央委員会（及び機関紙編集部）等の指導機関を選出し、中央集権的な党体制を確立したのである。

しかし、この画期的な「前進」は、同時に一種の「後退」をともしなわざるをえなかった。すなわち、この大会での対立を契機とする、党の「多数派」（ポルシェヴィキ）と「少数派」（メンシェヴィキ）とへの分裂であった。『何をなすべきか』に表現されている革命的社會主義と「經濟主義」という形での戦術をめぐる論争は、第二回大会では、とりわけ組織問題をめぐる対立となって爆発し、ここに、プレハーノフ、マルトフらの「メンシェヴィキ」＝日和見主義派とレーニンら「ポルシェヴィキ」との決裂が決定的なものとなった。『一步前進二歩後退』は、この大会での一見非常にささいなものに見える対立の深刻な根底を明らかにし、党の組織論における革命的な原則を明らかにしている。

大会での論争は、ブンドの地位、言語の同権の問題、プロレタリア独裁、農業綱領の問題等々様々な部面で行われたが、その核心をなしたのは、規約第一条をめぐる対立であった。すなわち、党員の資格、要件について、レーニンの草案は、「党の綱領を承認し、物質的手段によっても、また党組織の一つにみずから参加することによっても党を支持するものは、すべて党員とみなされる」というものであるが、マルトフの草案の第一条は、「党の綱領を承認し、党の任務を実現するため党諸機関の統制と指導のもとに積極的に活動するものは、すべてロシア社会民主労働党に所属するものとみなされる」というものである。

マルトフやアクセリロードらの人々が言うところは、党組織に属して働かないでも、自分を社会主義者だと「声明」する「大学教授」や「ストライキ参加者」など、党の同調者でしかない雑多な人々を党員として認めという、はば広主義の「門戸開放」政策であった。しかしこの様な主張は、かつて「經濟主義」としてあらわれたのと同様の追随主義であり、党を無定型で混沌としたものに転化する無政府的な空文句以外の何物でもない。レーニンは、この様な主張を断固として粉碎し、労働者階級の中の最も積極的な分子によって構成される「労働者階級の先進部隊としての党」の意義と独立性

を擁護している。労働者階級の中に「意識の程度や積極性の程度に差があるからこそ党への近さの程度にも差をつけることが必要なのである。われわれは階級の党である。だから階級のほとんど全体が（そして戦時や内乱時代には、完全に階級全体が）、わが党の指導のもとに行動し、できるだけ緊密にわが党に同調しなければならないのである。だが、資本主義のもとでいつかは階級のほとんど全体がその先進部隊の、その社会民主党の意識性と積極性までたかまることができると考えるのはマニローフ気質であり『追随主義』であろう。……先進部隊とそれに引きつけられる全大衆との差異を忘れ、ますます広範な層をこのすすんだ水準にたかめる先進部隊の不断の義務を忘れることは、自分をあざむき、われわれの任務の巨大なことに目を閉じ、これらの任務をせばめることでしかないであろう」。

マルトフらの主張は、中央委員会等の上部機関への指導・統制に反対し、地方的なサークル主義を維持しようとする立場、一言にしていえば、中央集権的な組織原則への不信、抗議と密接に結びついていた。このような無政府主義、サークル主義は、実際には、ブルジョア的個人主義が骨の髄までしみこんだ組織に所属しながらインテリに譲歩するものであり、「ブルジョアインテリゲンツィアの個人主義の味方」となつて、「プロレタリア的な組織と規律」に反対することを意味したのである。すなわち、戦術問題におけるのと同様、ブルジョア的心理に無力に屈服し、ブルジョア民主主義の立場を無批判的にとりいれ、プロレタリアートの階級闘争の武器をにぶらせているのである。

レーニンは、組織不信のインテリに反対して、組織のもとに団結して闘いぬくプロレタリアの立場を次の様に要約して、この本を結んでいる。「権力獲得のためにたたかうにあたって、プロレタリアートには、組織のほかにもどんな武器もない。ブルジョア世界の無政府的競争の文面によって分裂させられ、資本のための強制労働によって押しひしがれ、まったくの貧困と野蛮化と退化の『どん底』に絶えず投げおとされているプロレタリアートは、マルクス主義の諸原則による彼らの思想的統合が、幾百万の勤労者を一つの労働者階級に融合させる組織の物質的統一でうちかためられることによつてのみ、不敗の勢力となることができるし、またかならずなるであろう」。

こうした中央集権的な組織原則こそ、単なる「ロシア的特殊性」といったものでなく、プロレタリアートの階級闘争の普遍的な原則である。

#### 14. レーニン『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』

1905年の革命で、「人民の圧倒的多数がツァーリズム政府から完全に、断呼として、公然と離反」し、「転覆される古い政府のかわりにどのような政府をつくるか」ということ、すなわち臨時革命政府が焦眉の問題となっているという緊張した情勢の下で、本書は書かれている。

ボルシェヴィキは第三回大会で、ロシア革命が民主主義革命であるという前提に立って、臨時革命政府の意義を次のように特徴づけた。(1) 完全な政治的自由と民主共和制の実現、(2) それはただ勝利した人民蜂起の結果であり、臨時革命政府はこの蜂起の機関であること、(3) ロシアの民主主義的変革は資本主義の急速な発展を可能にすることでブルジョアジーの支配を強めるものであること、である。ここから、ボルシェヴィキは次のような戦術をたてた。(イ) 臨時革命政府の必然性を労働者階級の中にひろめること、(ロ) 反革命と闘い、また労働者階級の独自の利益を守るために臨時革命政府に参加すること、(ハ) 参加の条件として、社会主義的変革のためにすべてのブルジョア政党と敵対して社会民主党の独立性を守ること、(ニ) 革命を前進させるには社会民主党に指等される武装したプロレタリアートが臨時革命政府に絶えず圧力を加えることである。

ボルシェヴィキのこの戦術はメンシェヴィキの立場、臨時革命政府と並べてブルジョア自由主義派（「オズヴォジデーニエ」紙など）の憲法制定議会もツァーリズムと徹底的に闘うことができるかに言ったり、彼らとの協調を主張したりする立場と鋭い対照をなしている。レーニンは本書の中で事実上ツァーリズムとブルジョア自由主義派に追従するメンシェヴィキの日和見主義を容赦なく批判している。共産党は本書を何か「二段階革命論」や「労農同盟」＝統一戦線のドグマを証明するものであるかに卑しめるのだが、本書の意義は実はこうした日和見主義的俗論を真向から批判するところにあるのだ。

いかにもロシア革命は——共産党が「労農同盟」のドグマと矛盾しているということにさえ気づ

かずにこれを社会主義だと思いこんでいるのとはちがって——ブルジョア民主主義革命であり、農奴制の下に呻吟していたロシアを旧時代の残存物から解放して資本主義的發展の途におしやる革命であった。ロシアが資本主義へ前進すること、これは必然であった。だがどのような道を通ってか、すなわち「(1)『ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利』に終わるか、それとも(2)決定的勝利をかちとるには力がたりずに、ブルジョアジーのうちもっとも『不徹底』でもっとも『利己的な』分子とツァーリズムの取引に終わるか、二つに一つ」である。そしてこのことはロシアの労働者階級が来たるべき社会主義革命のために闘うことにとって、きわめて大きな意味を持っている。

もちろん「ヨーロッパのどの国の実例をとつてみても、ほかならぬ、けっして『臨時』ではない一連の政府が、ブルジョア革命の歴史的任務を実現したこと、革命を打ちやぶった政府すら、やはりこの敗北した革命の歴史的任務を実現しないわけにはいかなかった」のは明らかである。だがブルジョア自由主義派に追随し、ツァーリズムと取引するこの道は「長びいたぐずぐずした道であり、国民という有機体の腐った部分が苦痛をとめないながら徐々に死滅していく道」であって、このためにまっさきに苦しめられるのは労働者であり、貧農である。

ロシア革命がブルジョア革命である以上、労働者階級は「ブルジョア民主主義派と肩をならべてすすむことなしには、政治に参加することができない」という結論がでてくる。だがその場合にもレーニンとボルシェヴィキは民主主義革命の真の原動力である農民との同盟を主張したのに対して、メンシェヴィキは、自由主義派をツァーリの側にやらない——社共の論理とそっくり同じだ！——という理由で自由主義派との同盟、実際上は大ブルジョアジー、資本家への追随を行なったのである。

労働者階級と農民こそがブルジョア革命の真の革命的な原動力だということから、必然的に臨時革命政府は労働者農民の革命的民主主義的独裁でなければならないという結論がでてくる。そして「その勝利は、『合法的な』『平和的な方法で』作りだされたなんらかの機関に立脚するのではなくて、かならず武力に、大衆の武装に、蜂起に立脚しないわけにはいかないだろう。それは独裁でしかありえない。なぜなら、プロレタリアートと農民に、ただちに必要な改革の実現は、地主からも、大ブルジョアからも、ツァーリズムからも死にものぐるいの抵抗をよびおこすからである。独裁なしには、この抵抗を粉碎することも、反革命的企図を撃退することもできない。しかし、それは、もちろん社会主義的独裁ではなく民主主義的独裁であろう。この独裁は、(革命的発展のいくたの中間的な段階を経ずには)資本主義の基礎に手を触れることはできないであろう。それは、いちばんうまくいったばあいには、農民の利益になるように土地財産を根本的に再分配し、共和制をもふくめて首尾一貫した完全な民主主義を実行し、農民からだけでなく工場生活からもいっさいのアジア的・債務奴隷的なものを根こそぎにし、労働者の状態のいちじるしい改善と彼らの生活水準の向上との礎をおき、最後に、last but not least 革命の火事をヨーロッパに飛火させることができるだろう。

労働者、農民の蜂起の勢力が十分大きくなければ、これらの自由主義派とツァーリズムは取引することに成功するであろう。また労働者、農民が闘いとったものを自由主義派は切り縮めたり、篡奪したりするのである。だからメンシェヴィキが自

由主義派に追随するのはまさに「ブルジョア民主主義派を利するもの」なのである。メンシェヴィキもまた、社共のように、「過激」なことを言えばブルジョア自由主義派をツァーリズムの方におしやる、と泣き事を言ってきた。そして彼ら味方にひきつけておくことを理由に、労働者、農民の革命的な要求をおし下げ労働者、農民の「手をしばる危険」をおかした。だが「ブルジョアジーは、いつでも不徹底であるだろう。それをみればブルジョア民主主義派を偽善的でない人民の友と見なしてよいという条件とか条項とかをならべたてようとする試みくらい、幼稚でむちなものはない」のだ。

かりに、ブルジョア自由主義派が何かツァーリに対立して憲法制定議會を招集したとしても、それが真に民主主義的な憲法を制定したり、さらにはツァーリズムと闘い抜いてこれを徹底的に打ち破るなどと考えることはできない。ロシア革命は民主的共和制を要求した。だが要求するからにはそれだけの「実力」を、「物質的条件」をもっていなければならない。ロシアにおける民主的共和制は——我々の社会主義的変革と同様に——ただ「将利した人民蜂起」によることなくしてかちとることはできない。「政治的自由や階級闘争の大問題を解決するのは、結局は実力だけである」。

レーニンは臨時革命政府は「プロレタリア民主主義派の最小限綱領を実現する」義務を負わせており、臨時革命政府がこれを実行するべく、武装したプロレタリアートが「下から圧力を加える」ように呼びかけている。

レーニンは言う、「臨時政府は臨時的なものであるから、まだ全人民の承認を得ていない積極的

な綱領を実行することはできない、と反論するものがあるかもしれない。こういう反論は、反動派や『専制派』の詭弁にすぎないだろう。どんな積極的綱領も実行しないということは、今日では腐敗しきった専制の農奴的秩序の存続にあまんじることである」と。レーニンはこういう人々を「革命の事業にたいする裏切者」とさえ呼んでいる。共産党が民主連合政府は国民世論の合意がなければ何一つしない、というのと爪二つではないか。

## 18. レーニン 『共産主義内の“左翼”小児病』

——大衆と結びついた革命的活動の指針

第一次世界大戦後、ロシア革命の勝利に鼓舞され、ヨーロッパ及びアメリカ等に、第二インター流の日和見主義に反対する革命的、共産主義的潮流が急速に成長してきた。しかし、その多くは理論的にも実践的にも未熟で、急進主義を十分に脱却していなかった。本書は、こうした「左派」共産主義者の誤りを批判し、その克服を呼びかけたものである。ロシア革命の闘争経験を一面的に教条化して、合法的活動一般、あるいは議会選挙闘争、遅れた労働組合の中での活動を否定する急進主義者（レーニンは「左翼」小児病と呼んでいる）に対して、ロシア革命の経験を深刻に総括しつつ、ヨーロッパやアメリカ（つまり発達した資本主義国家）における共産主義者の一般的な実践的任務を提起しているのである。

まず、レーニンは、ロシア革命の経験から導かれる第一の教訓として、「プロレタリアートの無条件の中央集権ともっとも厳格な規律がブルジョアジーに勝利する一基本条件である」と述べ、このプロレタリアートの革命党の規律は何によってささえられ、なにによって点検され、なにによって補強されるか、と問題を立てている。レーニンによれば、それは第一にプロレタリア前衛の自覚、「彼らの献身、忍耐、自己犠牲、英雄精神」によってであり、第二にはもっとも広範な勤労大衆と結びつきをたもち、彼らと「溶けあう能力」によってであり、第三に前衛党の政治指導の正しさによってである。そして、これらの条件をつくりあげるのを容易にするものこそ正しい革命理論である。ポルシェヴィイキのもっとも厳格な中央集権と鉄の規律をつくり上げたものは、一方では全くのロシア的特殊性であるが、他方では「マルクス主義理論のきわめて強固な土台」があったと革命的な理論の意義を強調している。

このような立場からレーニンは「大衆の党」を「指導者の党」に対置して革命的な前衛政党的意義を否定するドイツの「左派」を批判し、「党精神と党規律を否定すること」、これはまさに「小ブルジョア的な分散性、動揺性であり、がまんし団結し、整然たる行動をとる能力のないこと」であり、放置すれば革命運動を破壊するものであると述べている。

また、ドイツの「左派」は、「労働者同盟」といった組織を労働組合に対置して、労働組合の意義や労働組合の中での闘いの意義を否定したが、レーニンはこれに次の様に反撃している。労働組合はプロレタリアートの団結の最高の形態つまり革命的な党が成長しはじめると、いくらかの反動的な特徴をあらわさずにはおかない。しかし、労働者の党と労働組合の相互作用を通じるほかには、プロレタリアートの発達は生じなかつたのであり、労働組合は、プロレタリア独裁の為の欠くことの出来ない「共産主義の学校」である。反動的な労働組合の内部で活動しないというのは、おくれた労働者大衆を、反動的な指導者、労働貴族の影響の下に放置することを意味する。「大衆をたすけ、大衆の同情・支持をかちとることができるようにするためには、困難をおそれてはならず……いやしくもそこにプロレタリア的または半プロレタリア的な大衆がいるなら、その機関、協会、団体——たとえば、それがどんなに反動的であろうとも——の中でこそ、系統的に、頑強に、根気よく、忍耐よく、宣伝し、扇動するために、どんな犠牲をもはらい、最大の障害にも打ちかつことができなければならない」。

また、ドイツの「左派」は、「歴史的にまた政治的に時代おくれとなっている議会制度という闘争形態に逆もどりすることは……断固としてしりぞけなければならない」と主張して議会選挙闘争の意義を否定した。レーニンはこれに反駁して次の様にいっている。プロレタリア党の戦術は、決して革命的気分だけにもとづいて立てられてはならないのであつて「その国家（とそれを取りまく諸国家と世界的な規模からみたすべての国家）のすべての階級勢力を冷静に、厳密に、客観的に評価し、また革命運動の経験を評価してその評価にもとづいて打ちたてられなければならない。「われわれにとって時代おくれとなったものでも階級にとって時代おくれになったもの」と考えてはならない。「議

会選挙や議会壇上の闘争に参加することは、まさに自分の階級のおくれた層を教育する為に、おくれた、しいたげられた、無知な農村大衆を目ざめさせ、啓蒙するために革命的プロレタリアートの党としてはどうしてもしなければならないことである」、「西ヨーロッパでは、労働者のおくれた大衆と小農のおくれた大家が、ロシアよりもはるかに強くブルジョア民主主義的偏見や議会主義的偏見にそまっているからこそ、それだからこそ、共産主義者はこれらの偏見を暴露し、はらいのけ、克服する長期にわたる、ねばり強い、どんな困難にもたじろがない闘争をブルジョア議会のような機関の内部からだけ行うことができるのである」。

イギリスの「左派」も、日和見主義者、ブルジョア議会主義者への反発から目標の「反議会主義」を主張したが、それに対してもレーニンは「日和見主義的でない立身出世的でない議会活動」をつくりだし、「いたるところで思想をめざめさせ、大衆をひきつけ、ブルジョアジーの言質を利用し、彼らがつくった機関、彼らが指定した選挙、彼らが全人民にした呼びかけを利用し、選挙のとき以外にはとうてい出来ないやり方で、人民にポルシェヴィズムを知らせなければならない」と言っている。

もち論、非合法闘争やストライキが一面的に美化されるべきでないのも同様、議会闘争や合法的闘いも又、超歴史的に一面的に美化されてはならない。一般に革命の歴史はいつでも内容が豊かで多面的で、生き生きとしており、「油断のできない」ものであるがゆえに、革命的階級は、その任務を実現するためには「すこしの例外もなしに社会活動のあらゆる形態、あるいは側面をわがものにすることができなければならないし、第二に革命的階級は、一つの形態が他の形態にどんなに急速に、不意にとってかわっても、それに応じられるようではなければならない」。

レーニンは、「左派」共産主義者の焦燥感をいさめつつ、粘り強い堅忍不拔の共産主義的闘いの意義を次の様に説いている。「直接の、公然たる、ほんとうに大衆的な、ほんとうに革命的な闘争の条件がないときに革命家となりうること……革命的でない情勢のもとで、また革命的な活動方法の必要をすぐには理解することのできない大衆のあいだで革命の利益をまもりうること（宣伝・扇動・組織によって）この方がはるかに困難であり、はるかに尊い」。

## 19. レーニン 『第二インターナショナルの崩壊』 ——社会排外主義を糾弾——真の国際主義を訴える

1912年、第二インターナショナルのバーゼル宣言は、帝国主義戦争に対する社会主義者の任務を次の様に規定した。

(1) 職争は経済的ならびに政治的危機をつくり出すであろう、(2) 労働者は、自分が戦争に参加することを犯罪とみなし、「資本家の利潤のため、王朝の野心のため、秘密の外交的とりきめを履行する為に、相互にうちあう」ことを犯罪とみなすであろう、また戦争は、「労働者のあいだに憤激と騒擾」を呼びおこす、(3) 社会主義者は、右に述べた危機と労働者のこの精神状態とを「人民を鼓舞し資本主義の崩壊をはやめる」ために利用する義務がある、等々。

だが、1914年、第一次世界大戦が勃発するや否や、ドイツ社会民主党はじめ第二インターナショナルの諸党は、少数の左派をのぞいてことごとくこうした国際主義の立場を投げ棄てて自国の戦争政策を擁護する社会愛国主義、社会排外主義の立場に転落した。カウツキー、プレハーノフはじめ第二インターナショナルの理論家達は、様々な詭弁を弄して、自己の裏切りを覆い隠し、正当化しようとした。『第二インターナショナルの崩壊』をはじめとする一連の諸論文は、こうした社会排外主義の役割、本質、その起源を徹底的に暴露し、その犯罪性を糾弾すると共に、帝国主義戦争に反対する労働者の真の国際主義の立場を明らかにしている。

レーニンによる日和見主義に対する批判は、徹底した弁証法の立場に貫かれている。レーニンはいう。「弁証法は、あたえられた社会現象を、その発展において全面的に探究することを要求し、外的な、外見的なものを、本源的な運動する諸力に、すなわら生産諸力の発展と階級闘争とに帰着させることを要求する」。マルクス主義者は、戦争の性格を位置づけるにあたって、いろいろな「論拠」の中の一つを取り出して理論づけるのではなく、この様な弁証法の立場を描かねばならない。レーニンは、クラウゼヴィッツの有名な定式をもつて、戦争に対する科学的な位置づけを与える。「戦争は異

った（すなわら暴力的な）手段による枚約の継続である」、マルクス主義者は、あらゆる戦争を「そのときどきにおける当該関係列強の——およびこれらの国々の内部の階級の——政治の継続」として考察しなければならない、と。

この様な立場から、レーニンは、自国の帝国主義戦争を、封建制に反対する国民戦争や帝国主義的抑圧からの解放をめざす民族戦争と同一視したり、また自国の戦争を「防衛戦争」とみなそうとする詭弁を徹底的に暴露する。「封建制と絶対主義にたいする闘争の『政治の継続』、つまり自由を獲得しつつあるブルジョアジーの政治の継続を、老衰したブルジョアジー、すなわち帝国主義的ブルジョアジー、すなわち全世界を略奪したところの……反動的ブルジョアジーの『政治の継続』と比較することは、アルシンとプードを比較することを意味する」。

また、日和見主義者たちは、革命への期待は幻想になった等々、革命の必然性を否定することで、帝国主義的ブルジョアジーの政府に対する革命的行動を否定し、自己の裏切りを正当化する。レーニンは、この様な主張に次の様に反論する。「革命的情勢なしに革命は不可能」であるが、一般的にいつて革命的情勢とはどの様なものか？

（1）支配階級にとって、不変のかたちでは、その支配を維持することが不可能になること、（2）被抑圧階級の貧困と窮乏が普通以上に激化すること、（3）右の諸理由から、大衆の活動力がいちじるしく高まること、である。そしてさらに、この様な「客観的变化」に「主体的変化がむすびつくばあい、つまり旧来の政府を粉砕する（またはゆるがす）にたる強力な革命的大衆行動をおこす革命的階級の能力がむすびつくような場合にだけ」革命はおこる。そして、この様な立場から見る時にヨーロッパの大多数の先進国と大強国には革命的情勢が現に存在する。それゆえ、この様な情勢における社会主義者の任務は「革命的な情勢が存在することを大衆の前に明らかにし、その広さと探さを説明し、プロレタリアートの革命的自覚と革命的決意をよびさまし、プロレタリアートを革命的行動にうつらせ、この方向で活動するために革命的情勢に応じた組織をつくりだす」ことである。

レーニンは、この様な立場から、単に資本主義の基礎の上での「軍備縮小」や「永遠平和」を呼びかける小ブルジョア的な平和主義に対しても徹底して反対する。「現在では、もしもブルジョア諸政府が革命的に打倒されないならば、平和は帝国主義戦争の継続としての帝国主義的平和にすぎないこと、この点をブルジョア平和主義者も社会主義的平和主義者も見していない」（『ブルジョア平和主義と社会主義的平和主義』）。かくして、戦争に対するプロレタリアートの立場は、自国政府の擁護でも、単に平和を要求することでもなく、自国政府の打倒を目指す革命的大衆行動を發展させること、一言にしていえば、「帝国主義戦争を内乱へ！」というスローガンに集約されるのである。

さらに、レーニンは、この社会排外主義がどこから生まれてきたかを明らかにしている。「社会排外主義とは、一定の程度まで成熟した日和見主義」であり、社会排外主義の根本的な思想的政治的内容は日和見主義の基礎と一致する。社会排外主義とは、「長い間の比較的『平和な』資本主義の時期につよまり、恥しらすになり、思想的＝政治的に立場が明らかになり、ブルジョアジーと政府に密接に接近してしまった日和見主義」である。長い間の合法主義と『大臣病的な議会主義』の習慣に染まってしまった彼らは、革命的な情勢がやって来た時に、違った闘争形態に移行しなければならないことを理解することができない。合法団体の成長が帳簿いじりに終始するすこしのろまな、だが良心的な俗物どもの習慣ということが、危機の瞬間には、これらの良心的な小市民をして、裏切者、反逆者、大衆の革命的エネルギーの絞殺者にしてしまう事態をみちびいたのである」、こうした日和見主義に代わる「革命的な組織へ移行」することが必要であり、「この移行は、革命的エネルギーの絞殺者である古い指導者たちに相談することなしに、古い党の頭をとびこえることによって、それを破壊することによって、はじめて可能である」。

日本のブルジョアジーの軍国主義への転進が始まる中で、共産党、社会党の社会排外主義への転落は急速に強まっている。レーニンの社会排外主義への批判は、今こそ真剣に学ばなければならない。